

猶序でながら、最近讀んだアイルランドに關する外國書として A. Rivoallan: L'Irlande (Collection Armand Colin N°170 1934) があるが本書は歴史よりも、前書に於て比較的手薄と思はれた個所即ちアイルランドの文學、アイルランドの地理的様子、アイルランド自由國をとりまく最近迄の國際關係等。アイルランドの現勢を主體とした書物であり、良心的に書かれた書たる事を認めるのである。叙上二冊の和洋の書物を以てすればアイルランド自由國の解明は殆んど完全に近き事と思はれる。敢て江湖に應むる次第である。(私文堂發行、五〇錢(豐田堯))

Beggs, Whitmore S. International boundary; a study of boundary functions and problems.

(Columbia University Press, 1940.)

著者はいふ、「何れの大陸にも國境問題がある。有效にこれを解決するには須らく平和的手段によるべきだ」と。寔に國家のあるところ必ず國境があり、國境のあるところ必ずこれを繞つて係争がある。アジアには滿ソの國境問題があり、ヨーロッパにはドイツを中心として多くのそれがある。北米には合衆國、カナダの對立があり、南米にもペルー、チリ、アルゼンチンの國境を繞つて紛争がある。更に尙、數多くの問題が世界の各地に秘められてある。かゝる國境問題は將來も尙、地球上に國家の存続する限り

絶えることのない問題である。この國境の沿革を察し、そのなす機能を見て、更にそれにからまる問題を論じ、進んでそれに解決の鍵を與へんとしたのが本書である。

アメリカ國務省の地理學者である著者が一昨年のコロンビヤ大學に於ける自らの講義「現代地理學の諸問題」を刊行したもの、この講義が時局的示唆に富むが故に敢て出版して江湖に問うたといふ。

第一章、第二章に於ては國境の意義を述べ機能を論じて本書の緒論となしてゐる。第三、第四章に於ては本書の中心問題をなすべき合衆國、カナダの國境を説く。第五章より第十五章に互つては南米、ヨーロッパ、アフリカ、アジア、各大陸に於けるこの問題に瞥見を與へて前者との比較に資し、更に水上に於ける國境にまで言及してゐる。最後の第十一章に於ては國境問題の平和的解決策を論じて本書の結論に代へてゐる。尙ほ、附録には世界各國の國境の長さの表、合衆國、カナダ國境に關する外交文書等が載せられてある。東亞に、西歐に、風雲急を告げ、國境の變改が着着實行に移されつゝある今日、かゝる本書が世に送られたことは興味深い。

本書の個々の章に對する批評は暫く之を措くが、全體に亘つて之を通觀するにどこか淺薄さがある。國境の長さとの面積との比を表示し、或は人口との比率を求めて、その軍事的役割を論じてゐるあたり、ゾーパンの地理的壓力商の方法を思はせる。かゝる方法は國境問題に對しては多大の示唆を與へるものであらう

が、かゝる統計的處理を徒らに重視した爲めか、一見科學的には見えるがどこか深みがない。この種の問題を扱つたハウスホッフの「グレンツェン」などに比べて遜色あるを免れない。尤もこの書が大學の講義をまとめたものであり、著者が序言にも言ふが如く歐洲動亂の勃發によつて精細な研究が行はれ得なかつたとすれば些か酷評に過ぎるかも知れぬ。ともかくも本書が國境を大觀し、それにかゝる有らゆる問題を明確に叙述してゐることは國境政治地理學のテキストブックとしての價值を充分ならしめてゐると思はれる。

今や吾らが理想は八紘一字の精神であり、そこには從來の如き國境の概念はない。國境問題の如き地を描つて存すべき筈がない。唯あるものは上、皇道と下、所を得て墜壊滅腹する民のみである。しかしながらかゝる理想は直ちに實現すべきものでなく、その實現には尙多くの段階があると言ふまでもない。かゝる段階に於ては尙多くの國が存続し、國境はそれら諸國の紛争の地盤となるであらうことは容易に考へられる。國境問題は多くの國境の不自然から起るといふ。果して然らば、國境を自然に復し、本然の姿に歸せしむれば國境問題は永久にこの世界より消滅する。之即ち皇道開闢の姿であらねばならぬ。かく考へればこの研究は理想實現の爲めの不可缺の手段とも言へる。

この意味に於て今こゝでは本書の出現を禮讃して置かうではないか。(本文二七二頁、丸善版、拾四圓六拾錢) (柴田幸夫)

古代科學

ハイベルク著
平田 寛譯

「本書は広く讀まるべき書として、かずかずの示唆を含んでゐます。しかも本書を讀まれる各人の立場によつて、これらの示唆にもおのづから強弱の度が顯れるやうに思はれます。たとへば、今日の科學者(廣義での自然科學者)が本書から何か有益な科學知識をえようとされても、ほとんどそれは徒爾に終るでせう。だがひとたび、希臘人たちが科學を『創造した』といふ一點に想到されるならば、今日のわが國の科學者ほどそれを切實に必要とするひとびとはゐないでせう。希臘人たちのあの逞しい創造的精神こそは彼等の誤謬に満ちた科學的業績を償つてなほあまりあるものと思ひます。彼等にあつては、科學とは職業であるまへに、まづ自然に對する純粹な探究そのものだつたのです。コペルニクスに對するアリストテレスの意義を強調すること以外に、この創造的精神を把握することが何よりも大切だと思ひます。

本書が科學史の一部であるといふ點からは、歴史家にとつても重要な示唆を與へるでせう。文化における科學の役割を十分に察知してゐながらも敢て科學の内容を知得しようとしなかつた歴史家(こゝでは特に古代文化史家は、こゝに新たな生氣をえられるにちがひありません。古代東洋の『術』から古代希臘の『學』への推移における外在的條件の闡明、古代における科學と宗教との關